

最初の楽句が闇の中から浮かび上がり

不協和音が過去をたくり寄せるように私を見つめる

「私のなどは一時的な楽しみに過ぎない」
「お前について来れる奴など居るまい」
「こんなに喋ってしまうなんて今までなかった」
「あなたの派長に合わせることなどできない」
ふとこぼれ出た数々の何気ない呟きが
それぞれの谷を流れ下るうちに次第に近付き
森の間から互いのきらめきをちらりと見つけ
次々と合流して八長調という本流に溶け合う

数々の生命が同じ流れを下ってゆく

それぞれのきらめきを水しぶきの中に時々散らし
なだらかな田園はゆったり腕を組んで歩き
曲がりくねった谷あいに分かれることもなく
全く異質の音色をもったそれぞれの流れが
互いを深く知り合ったというわけでもないのに
それぞれの希望を胸に秘めながらも
身を寄せ合うように海を目指して下ってゆく

かつてこの私はこの流れから遠く出して
傍観者として岸に佇んでいたこともある
何かを怖れ、何かから逃げ出して
その時にこの流れが何と美しく思えたらう・・・

流れの中に埋もれても私が私であることに
それぞれがそれぞれであることに気付いて
おずおずと流れに浸りはじめた時に
私へと優しく伸ばされた手は今も忘れることはできない

今やこの、時に激しく、時に穏やかな流れを
私はしっかりと何かを抱き締めながら下っている
同じように何かを抱き締める人々とともに
ひとりでありながら孤独でなく

(1984.5.4)